「言語と文化」の関係を考える

平野 尊識（本学部教授）

1 序　論

本論の目的は、言語と文化の関係、或いは「つながり」について考察することである。「言語と文化には密接な関係があるのに、今またどうして？」との声が聞こえてきそうである。しかし果たしてそうなのか、再検討してみる必要がある。本論では、まず文化について考察し、それを言語と比較することによって両者の関連性について検討する。

上で「再検討」としたのには理由がある。一般に、「言語と文化の相互関係」は当然のように受け取られている。しかしそれは、表面的に現れる言語の**使い方**の違いに基づいて、「ことばと文化には密接な関係がある」という主張である。このような主張は、地域社会とそこでのマナーとの関係に類似する。つまり、地域社会が異なれば、マナーや作法においても相違が認められるからである。山口市のある菓子店での話である。お礼の意味で、ノシに「志（こころざし）と書いてください」とお願いすると、「志は死に通ずるから…」と断られたことがある。私が驚いたのは当然である。そのようなことを今まで聞いたことがないこと、更に客の要求が退けられたことである。（これには後日談があるが、ここでは省略する。）言語の場合で考えると、これは「使い方」の問題である。

このレベルでの「言語と文化の関係」は、例えば『世界民俗事典』に相違点をリストしておけば、十分解決できる。これによって、言語と文化を切り離すことができるからである。

「文化（または地域）による表現の相違」の具体例として、挨拶表現と、それが指す時間的差異について述べておこう。ここで注意すべきは、結果的に挨拶表現が絶対時間によって決まる場合、相対時間によって決まる場合、それらが混在する場合の、三つの差異しか存在しないということである。因みにタガログ語の「おはようございます」は、午前12時迄という絶対時間に従うそうである。

図１を見ると次の点が分かる。タガログ語とインドネシア語では絶対時間によって決まる部分が多い。それに対して日本語では、絶対時間において「おはようございます」と「こんにちは」が交錯する部分がある。これは、個人の生活リズムが関与しているからである。

異文化理解とは、色々な文化の間に見られるズレを理解することである。図１は、言語と文化の関係を示すものではなく、各地域における文化的差異を反映するものである。このような文化的差異は異文化理解の守備範囲であり、この異文化理解は、まず他人を理解し、その存在を認め合うことから始まる。

図1：挨拶表現と使用時間帯（タガログ語、インドネシア語、日本語）

TIME	TAGALOG	INDONESIAN	JAPANESE
6:00	Magandang umaga	Selamat pagi	Ohayoo
		Selamat siang (11:00～16:00)	
12:00	Magandang tanghari'		Konnichiwa
	Magandang hapon		
15:00		Selamat sore (16:00～18:00)	
18:00	Magandang gabi	Selamat malam	Konbanwa
21:00			

2　比較研究における注意

前節では、言語を文化と比較する場合、言語の「使い方」だけにとらわれてはならないことを述べた。大切なのは、言語の**仕組み**である。言語の本質は言語の仕組みに反映されるからである。何故「使い方」にとらわれてはいけないのか。本節では、この観点から比較研究において注意すべき点について考察する。

私達は環境の変化にうまく自分を適応させながら、日々の生活を送っている。環境の変化とは、季節の変化、加齢などである。寒ければコートを着たり、マフラーを巻いたりする。また、加齢によって近くのものが見えにくくなると、老眼鏡をかけたりもする。しかし、このような変化は、個人の存在そのものの変化ではない。あくまでも、日常生活を快適に過ごすための手段である。例えば衣服は、気候などの環境によって形態、色彩、材料などが異なる。この違いは環境による違いであり、「使い方」における違いに相当する。本来「何がしかのモノを身に付けている」事実（「仕組み」）こそが重要である。たとえそれがペニスケースであろうとも。

もっと身近な例として、「お雑煮」を挙げることができる。その内容、例えば餅の形、ダシの取り方には地域差がある。この「地域差」が「使い方」であり、正月料理として「お雑煮」が存在することが「仕組み」である。このような地域差は、例えば「民俗学事典」などがあれば対応できる。

言語においても、「環境への適応」が観察される。一例として、英語の複数形について考えてみよう。英語の数えられる名詞は、その指示対象が複数個存在する場合、複数形によって表される。具体的には、-(e)sの文字を付加することによって標示される。しかし「複数」の概念は文字ではなく、その音声形である[əz]/[s]/[z]によって示される。大切なのは、名詞が[s]、[z]、[ʧ]、[ʤ]などの歯擦音で終わる場合[əz]が続き、[p]、[t]、[k]、[f]などの無声子音で終わる場合[s]が続く、それ以外の場合には[z]が続くことである（この点に関しては、Halle 1978: 300-301を参照）。dish、book、chairには夫々[əz]、[s]、[z]が付加される。複数という概念が、「二つ以上」のように、全て同じであることを考慮すると、その概念を表す形も本来同一のはずである。しかしながら、実際には三つの形で現れる。実は、この三つの形は一つの形に還元できる。本来同一だったものが、名詞の語末の音声の違い（環境）によって、三つの具体的な音声として現れているだけである。言語学では、この「複数」を表す同一の形を「複数形態素」と呼び、{PL}のように表す。この形は音韻論的には、/z/のように仮定できる。この複数を示す/z/

が複数形を現す本来的な「仕組み」である。これが名詞の語末の音声特徴に応じて実際に現れるのが、上に述べた三つの音声形である。「使い方」とはまさに、この「音声形」である。抽象的には一つの複数形/z/が、その前に来る音声の性質によって三つの「音声形」[əz]/[s]/[z]として現れることが、環境へ適応したことである。

結論的には、言語と文化を比較する場合、両者の表面的な現象（使い方）だけを捉えての主張ではなく、本質（仕組み）を考慮した上での主張が重要なのである。

3　言語と文化の関係

3．1　「関係あり」説：その1

「日本語は、結論をはっきり言わない言語であり、否定の助動詞が文末に現れることもその一例である。これは、日本文化における何事も曖昧にする傾向と一致する。」このように、明確な理由がないにも拘らず言語を簡単に文化と結びつける傾向がある。例えば山口大学の人文学部にも言語文化学科があるが、それが何を意味しているのかは曖昧である。

日本語が論理的でないと言われるのは、実は言語使用者の「使い方」の問題であって、日本語の「仕組み」の問題ではない。日本語と同じ語順の言語は、世界の言語の45% を占め、動詞の後ろに助動詞を取る言語の方が多いという事実がそれを証明する。逆に英語と同じ語順の言語は35%に過ぎない（Steel 1978と柴谷 他. 1982を参照）。従って「言語と文化」の関係を論じるとき、言語と文化それぞれの本質をまず吟味する必要がある。

角田三枝（2001: 14-15）に、興味深い指摘がある。第二言語を教授する場合、二つの立場があるという。言語道具主義と文化至上主義である。言語道具主義についてこう説明されている。「言語はあくまでも共通に意志の疎通をはかるための道具、或いは手段という立場、（中略）文化的な側面は出来るだけ排除され（る）。」これに対して文化至上主義は、「ある言語とその文化の宗主国である国家、或いは民族の文化そのものに価値を置き、それ自体が目標になる。（中略）我が国において、明治維新以降、欧米の進んだ文明を取り入れるために言語を学ぼうとした学習姿勢も、この範疇に入る。」と説明されている。この文化至上主義は、今もなお深く根を下ろしているようである。更に角田は、文化相互理解教育こそが言語と文化を繋ぐ大切な視点であることを提唱し、その理由と方法論を詳しく説明している。言語については角田太作（1991: 225-237）が、「日本語は特殊な言語ではない。しかし、英語は特殊な言語だ。」という主張を具体例に基づいて展開している。

3．2　「関係あり」説：その2

本節での検討課題は、「なぜ言語と文化は密接に関係すると言われるのか」ということである。これについての私の見解はあくまでも言語学者としてのものである。

前述のように、私は言語の使い方のレベルと仕組みのレベルを区別した。言語と文化との密接な関わりを主張する場合、語彙や語用論のレベルだけの観察で議論が展開されているからである。単語や語用論には、その地域の習慣が色濃く反映される。例えば文化事象を表す語彙を見てみよう。数詞の使い方を例に取ると、日本では、４と９の数が嫌われる。それぞれ、死と苦と同音であることによる。これは言語学的には、一種のタブーである。しかし、この４と９は本来の大和言葉ではなく、漢語に由来する。その九が中国では陽の数であり、特に９月９日は一番大きな陽の数が重なることから、重陽の節句

と言われ、吉日とされる（2006/10/23、角田三枝氏の山口大学人文学部における講演『日本語教育、異文化理解と日本語学』による）。これに関して、菅原道真公の「去年の今夜、清涼に侍す...」という漢詩を思い出す。因みに英語では、奇数を**odd** number（訳語の「**奇**数」にも注意）と言う。このような言語の「使い方」までも言語学習に要求されたのでは、その地域の言語をマスターするまでに、相当の時間が掛かることになる。文化が言語表現に与える影響は、文化事象を表す単語（Sapir 1921: 219を参照）と比喩表現に限定される。前者においては、侘び、寂び、禅など、後者においては「箸が進む」、「鎬を削る」などである。この「箸」や「鎬」は、同時に文化事象を表す語彙でもある。

このように考えると、言語が文化と関係するのは、文化事象と関連した「語彙」だけということになる。このような現象は「言語と文化」の関係というよりも、むしろ「言葉と文化」の関係と言った方が適切であろう。

それでは、「人間は言語という色眼鏡を通して世界を見ている」という言語相対論はどう捉えるべきなのか。心理学において、言語以前の直感的思考が存在すると言われていることから、むしろ人間の思考回路の方が言語に影響を及ぼしていると考えるべきであろう。

4　文化とは？

文化とは色々な要素の集合体である。ここでは、文化の集合体を構成する各要素について考えてみたい。それは、ファッション（衣服）であったり、生死（しょうじ）と密接に関係する宗教、社会生活における道徳であったり、また一年、季節の変化と言った生活のリズムであったりする。その他の要素についても考察する必要があるが、ここでは立ち入らない。

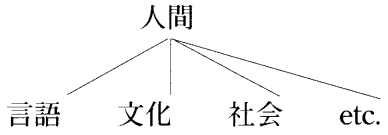
文化に関して忘れてならない大切なことがある。宗教にしろ、衣服にしろ、表面的には地域によって異なった現れ方をする。しかし、宗教がある、衣服を着用するということが重要である。つまり、宗教、衣服、住宅などの文化的要素は、人間の存在を前提とする。文化事象は複数の人間の存在によって産み出されるからである。

人間が産み出したものならば、表面的な現れは異なっていても、その本質は共通している可能性がある。既述のように、人間には生があり死がある。それは動物である限り、逃れることができない。ここから宗教が生まれる。このようにして、キリスト教、イスラム教、仏教などの宗教が生まれてきた。このような宗教の表面的な違いは大きな問題ではない。「その違いのために人間は戦争をしてきた／いるのではないか。だからこそ、その違いが重要なのである。」という主張も政治的には正しい。しかし宗教という文化的要素も、人間の存在という立場から議論せねばならない。実際に戦争するのは宗教ではなく、人間であることに注意。その他の文化的要素についても同様である。そして、言語も複数の人間の存在が前提となることを忘れてはならない。

ここで言語と文化との関係を再確認しておきたい。繰り返しになるが、大切なのは人間の存在である。言語と文化は、この人間の存在を介して結び付いていることを確認する必要がある。つまり言語と文化の関係は、(1) に示すような直接的な関係ではなく、(2) のように、人間の存在に支えられた間接的な関係である。

(1) 言語 ――― 文化

(2)



5　言語の仕組み

3. 2節で述べたように、言語が文化と関係するのは、文化事象と関係した語彙ぐらいである。（サピアも同様のことを言っている。Sapir 1921: 219を参照。）これを以って、言語は文化と密接に関係していると言うのは早計である。言語と文化の関係は、一般にはこのレベルで議論されているのではないかと思われる。語順などの統語法が「文化と関係する」など決して考えられない。言語を文化と比較する場合、この「言語の仕組み」に焦点を当てることが大切である。

以下では、言語がどのような「仕組み」を持っているのかについて説明し、実際の言語ではその「仕組み」がどのような「変異」を示すのかについて考察する。言語学にとって重要なのは、その変異を人間の頭脳との関連で、どう捉えればよいのかということである。従ってこの変異は、人間の頭脳が処理できる範囲のものでなければならない。それは必然的に変異であって、差異ではない。この節ではその具体例について述べてみたい。

5．1　疑問を表す方法

ここでは日本語の疑問を表す「か」について、他の言語と比較しながら説明する。

日本語の疑問標識の「か」は文末に現れる。しかし、言語全体を見ると、その現れ方は次の3通りしかない。

(3) a. 文末
　　b. 文頭
　　c. 文中

以下に、その具体例を挙げる。

(4) a. Kimi wa eigo o zyoozu ni hanasemasu **ka**?　（日本語）
　　Q

　　b. **Do** you speak English well?　（英語）
　　Q　Inf

　　c. Marunong ka　**ba**-ng magsalita'　ng　Inggles?　（タガログ語）
　　good:at　you (SG)　Q-LK speak (Inf)　ACC　English
　　'Do you speak English well?'

このように見ると、「疑問の助詞が文末に現れるから日本語は曖昧だ」、「英語は最初にdo、doesが来るから疑問文であることがすぐ分かる」などと言って、私たちの母語である日本語を非論理的だと決め付けることはできない。日本語話者が自らそう言うのならば、自虐的ですらある。更に言えば、人間が用いる言語の仕組みが分かっていないことを意味する。語末に疑問標識が現れるのはトルコ語でも同じである。一般に日本語と同じ語順の言語は、疑問標識は文末に現れる傾向があり、英語と同じ語順の言語は主語と動詞を入れ替えるのが普通である。英語のようにdo、doesが語頭に現れる言語はむしろ例外的

である（角田太作1991を参照）。インドネシア語では、(5) に示すようにかなり自由であるが、(5d)のように文頭の語に疑問を示す-kah、若しくは文頭にapa(kah)が付くのが普通である。

(5) Indonesian （インドネシア語）

a. (Anda) Mau makan apa?
you want eat what
'What do you want to eat?'

b. Siapa-**kah** nama engkau?
who-Q name you
'What is your name?'

c. Apa(**kah**) yang enak disini?
what REL delicious here
'What is delicious here?'

d. Kamu-**kah** yang mau pergi ke Jepang?
you-Q REL want go to Japan
'Is it you who want to go to Japan?'

(6) Tagalog （タガログ語）

a. Sino **ba** siya?
who Q s/he
'Who is s/he?

b. Marunong **ba** siya-ng magsalita' ng Tagalog?
good:at Q s/he-LK speak (Inf) ACC Tagalog
'Can s/he speak Tagalog well?'

タガログ語では、疑問を表す語*ba*が (6) に示したように、文頭から二番目の位置に現れる。因みに、3人称には男性と女性の区別がない。

言語全体を見回すと、疑問標識は、このように三種類の位置にしか現れない。しかし、音韻論的には一種類と言ってよいのかもしれない。上昇調だけでも、yes/no疑問文が可能だからである。

言語の構造（「仕組み」）を明らかにする場合、表面的な違いを強調するよりも、何が本質的なことかを明らかにすることが重要である。表面的な違いは、本質的なところから判断すると、極めて少ない数に還元できるからである。この意味においてこれらの違いは、変異、つまり位相のズレであって、差異ではない。

5．2 語順の問題

5．2．1 主語、目的語、動詞の組み合わせ

他動詞文における主語をS、目的語をO、動詞をVで表すと、その組み合わせは論理的に次の6通りしかない。

(7) a. SOV b. SVO c. VSO d. VOS d. OSV e. OVS

また実際の言語には、その全てがまんべんなく現れるわけではない。（何故そうなのかは、興味深い問題である。）以下に大体の傾向を%で示してみる。

(8) SOV 45%, SVO 35%, VSO 18%, VOS 2%, OSV 0%, OVS 0%

3.1節で述べたように、日本語のような主語・目的語・動詞型の言語の方が、英語のような主語・動詞・目的語型の言語よりも多いことに注意する必要がある。

5．2．2　VO言語とOV言語

いま主語を除外して考えると、世界の言語はVO型言語とOV型言語の二つのタイプに分類できる。そして、一般に両者の間には語順に関して次のような相関関係が認められる。

(9)

	VO言語	OV言語
a.	前置詞＋名詞	名詞＋後置詞
b.	助動詞＋動詞	動詞＋助動詞
c.	名詞＋関係節	関係節＋名詞
d.	名詞＋形容詞	形容詞＋名詞
e.	名詞＋指示詞	指示詞＋名詞

インドネシア語は、典型的なVO言語であり、日本語は典型的なOV言語である。

5．2．3　鏡像関係

(9)に示したVO言語とOV言語の語順の関係を公式化すると、両者は鏡に映したように対称をなす。

(10)　A　B　|　B　A

このような関係を鏡像関係(mirror image)と言う。Smith (1978)は、鏡像関係の典型的な例として、(11)のような日本語と英語の例を挙げている。

(11)　Tookyoo eki kara densya de itizikan kurai nisi-e itta tokoro ni Kamakura to iu mati ga arimasu
14　13　12　11　10　9　8　7　6　5　4　3　2　1

= There is a town called Kamakura at a place (you can reach) going west about one hour by
1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　11

train from Tokyo Station.
12　13　14

VO言語とOV言語が、語順の個々の組み合わせにおいて何の関連性もなくバラバラと言うのであれば、人間は「言語」を制御することができない。個々の言語の表面的な差異は、例えば上の(9)に示したように、表面的なものである。個々の言語が「**体系的に異なっている**」からこそ、もっと抽象的なレベルでは同じ原理によって支えられている可能性がある。そして表面的な差異は、どこかのスイッチを切り替えてやれば、ある程度自動的に生起するものであると考えることができる。すなわち、表面的な差異は、パラメータの違いによって説明できる。従って、この差異を私達は変異と考えるのである。(このような考え方は、チョムスキーの「原理とパラメータ」の理論に基づく。) 連体修飾構造の例で変異を表すと、主に次の二種類が認められる。

(12)　a. VO: [Head] + Modifier = Head initial languages　　主要部前置
　　b. OV: Modifier + [Head] = Head final languages　　主要部後置

「言語」にはこのような「仕組み」が内在すると考えることができる(実際はそれを受け入れる私達の「脳」に、そのような仕組みがあり、(9)はその具体的表れに過ぎない)。

このようにして、私達は母語を極めて短期間のうちに、しかも教えられずに自然に身に付けることができるのである(Halle 1978)。

5．2．4　個々の言語はどの程度ＶＯ/ＯＶ的か

このような質問自体、言語が必ずしもYESかNOかという二者択一的なものではなく、ある程度のグラデーションを許す体系であることを示す。言語は、歴史的な理由（言語変化）や社会的な理由（他言語からの影響）などによって変化するからである。ここでVO/OV性のグラデーションを図によって示す。

図２：VO/OVの程度差

OV ―――――――――――――――――――――――――――――――― VO

日本語　　トルコ語　　中国語　ドイツ語　英語　インドネシア語

中国語は、基本語順はSVOであるが、「把」を目的語の前に置くと、SOVになる。また連体修飾構文では、修飾節の後ろに「的」が来てその後ろに被修飾語が来る。従って、VO型でもかなり左側に位置する。ドイツ語が英語より左に位置するのは、ドイツ語の従属節において、動詞が後置されるからである。

5．2．5　鏡像関係の具体例：日本語とインドネシア語

ここでは日本語とインドネシア語を比較することにより、典型的なOV言語と典型的なVO言語の間で、鏡像関係がどのように反映しているかを観察する。

(13) 私は　本を　読みました = Saya sudah membaca buku itu.
　　1　2　3　3　2　1

(14) ここに　とても　美しい　花が　あります = Ada bunga bagus sekali disini.
　　1　2　3　4　5　5　4　3　2　1

(15) [本を　読んでいる]　学生 = mahasiswa [yang membaca buku] itu
　　1　2　3　3　REL　2　1　the

5．3　言語における普遍性と個別性

5.1節と5.2節で、言語間に幾つかの変異が見られることを例示した。ここで注意すべきことは、変異という単語の意味である。差異という場合は、共通点がないことを意味するが、変異の場合は、位相のズレであり共通点が認められる。つまり、秩序あるズレを意味する。秩序あるズレと考える理由は、語順の異なり方も実際の言語間には極少数しか存在せず、それも結局VO対OVのように二つの選択肢に還元できるからである。これは、スイッチの切り替えを連想させる。スイッチをVO型の方にやると、例えばインドネシア語になり、OV型の方にやると日本語になる。その基本となる原理とスイッチは既に私達の頭脳の中に組み込まれていて、どの言語を母語とするかによってスイッチの切り替えが行われる。

6　ま　と　め

本論で明らかにしたことは、以下の点である。

(16) 言語と文化の関係

言語と文化の間には、人間の存在を前提とした間接的な関係しか存在しない。

(17) 文化的側面

a．文化が言語に影響するのは、文化事象を反映する語彙や語用論においてである。

b．ことばの使い方における違いは、生活のリズム、生活習慣などの違いの反映であり、これは例えば『世界民俗事典』の編纂によって解決できる。

c．文化的に異なるように見えるものでも、その根底には同じ原理が働いている。例えば、衣服、食事、住居、宗教などは表面的には違って見えるが、それらが存在するという事実には変わりがない。

(18) 言語的側面

a．言語にも文化にも「仕組み」の部分と「使い方」の部分が存在する。

b．言語の仕組みは文化の仕組みと関連しない。

c．言語には変異が見られる。この変異とは秩序あるズレである。

d．この変異は、「スイッチの切り替え」によって現れる。

略　語　表

Q: 疑問標識、SG: 単数、LK: 繋辞、Inf: 不定詞、 ACC: 対格、S: 主語、O: 目的語、V: 動詞、REL: 関係節標識

引用文献

柴谷方良・影山太郎・田守育啓　1982.『言語の構造 — 意味・統語篇』東京：くろしお出版.

角田三枝　2001.『日本語クラスの異文化理解：日本語教育の新たな視点』東京：くろしお出版.

角田太作　1991.『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版.

Halle, Morris. 1978. Knowledge unlearned and untaught: what speakers know about the sound of their language. In: Halle, Bresnan and Miller (eds.), *Linguistic theory and psychological reality*. 294-303. Cambridge (MA): MIT Press.

Sapir, Edward. 1921. *Language: an introduction to the study of speech*. New York: Harcourt, Brace & World, Inc.

Smith, Donald C. 1978. Mirror images in Japanese and English. *Language* 54: 78-122.

Steele, Susan. 1978. Word order variation. *Universals of Human Languages* 4: 585-623. Stanford: Stanford University Press.